

サミュエルは高空を逍遙する

勿忘草

風来坊という言葉は、あまりいい意味では使われならしい。ということ、大辞林の大先生に聞いてみる。

一つ目。決まった仕事に就いていない人。居住の定まっていない人。

これは違う。彼には年齢十八にして、決まった仕事があるそうだし、居住もしっかりあるらしい。いわゆる寮のようなもので、多くの人と同居しているようだが。

二つ目。どこからともなくやって来て、ぶらぶらしている人。半分当たりである。もう半分というのは、漢字に由来する。

風来坊。

「風のように来たる」

まあこつちでもいいのだが、

「風とともに来たる」

私のイメージだとこちらの方が近い。意味の正誤はともかくとして。

彼は、どこからともなく、風とともにやって来た。

そうして突風の如く、去って行った。

さて、ここに木漏れ日の美しい林道がある。春には花見に使われるほどに幅が広く、住民に愛されている林道である。

正確な長さは知らない。百メートル足らずだと思ふ。短距離走で走った距離と同じくらいというだけだ。

よく子供が「向こう側には秘密の世界がある」だの「夜に通ったら、白い服を着た女の人においでされた」だの、世代が変わっても大して変わらない噂話をする。残念ながら、私にはそういった経験がない。

ともかく、私の通学路には、その林道があった。毎日そこを通っていた。彼に遭遇したのも、全てその場所であった。

始まりは、桜吹雪の舞う頃。

「あーっ！」

甲高い声が飛んだ。同時に帽子も飛んできた。

後ろから来て、私の頭上を通り過ぎた黄色の帽子は、数秒後に後ろから来て、私の真横を通り過ぎた少女のものらしい。サーモンピンクのランドセルに、交通安全と書かれたカバーがつけてある。

健気に追ってくる持ち主を嘲笑うかのように、帽子は木の枝にとまった。少女が立ち止まり、風に揺れるそれを見つめる。

小学生の彼女は元より、高校生の私、いや成人男性でもとれない高さだった。いずれにせよ、とってやるつもりなどない。

彼女の背後を通り過ぎる。

そのときだった。

ひゆう——と、風が突然、軌道を変えた。

少女が喜びの声を上げた。

「ありがとう、おにいちゃん！」

……おにいちゃん？ まさか、あの帽子をとった者がいたのか。二メートルを超える大男がジャンプしたって、届かないだろうに。高跳びの選手か何かか。

挙動不審だと思いつつ、振り向いた。

——少女は帽子を持ち、こちらを見ていた。

「え……っ？」

一つだけ言っておくと、私は高校の制服を着ていた。紺色のスカートをはいていた。だから私が「おにいちゃん」になるのはありえない。

そうすると、残るのは一つ。前だ。

これが彼との、一度目の遭遇となる。

黒いキャップに眼鏡、シンプルなグレーの長袖シャツに、ダークブルーのVネックのカーディガン。ブラックの細身のジーンズと紐のショートブーツが、彼の長い足を強調している。

日本人なら似合う人間と、似合わない人間とで二分化するだろうが、眼鏡の下から覗く顔つきを見たところ西洋人のようで、それらの格好を完璧に着こなしていた。

青年の肌は、雪というよりは紙のように白い。生気が感じられないほど白いくせに、唇だけが妙に色鮮やかで、血を吸ったようだった。

外国人、というと、私は勝手に横にも縦にもポリュームのあるイメージを持っていたのだが、彼はそうではなかった。すらりと言背が高く、ところどころに無駄なく筋肉がついている。

……まあ、ここまではいい。日本人が皆、ちんくりんで顔が平たいわけではないように、西洋人にも色々なタイプがいるだろう。

問題は、彼の持っている物だった。

「紐をかけないと、またすぐに飛んでいってしまうんじゃないか」

意外にも、彼の口から流れ出たのは、やる気のなさそうな声で紡がれた日本語だった。発音には少し怪しさが残るが、文法はしっかりしている。

彼は扇子をぱちりと閉じると、少女に近づいた。

「顎に紐をかけるんだよ。できるかい？」

「できるよ。でも、かゆいんだもん。それに、みんなやってないよ」

青年が、私を通り過ぎていく。関係なさそうな素振りを見せながら、私はほんの少しだけ、彼の顔を盗み見た。

そうして息を呑み、彼を追うように、再び振り返ってしまった。

「おにいちゃん、みてみてっ。あのね、ここにね、ゆきのね、なまえがついてるの。それとね、ここには、うさぎさんがぬってあるのー！ ママがね、ぬってくれたんだよ」

「へえ、すごいじゃないか。大切な帽子なんだね」

自分の身長の半分くらいしかない少女に合わせ、青年がかがみこむ。

「うん、たいせつ！」

「じゃあ尚更、なくしちゃいけないんじゃないかな」

「う……ん」

「この帽子は、君の姿が、車を運転している人から見えるように、かぶるものなんだよ。君が事故に遭わないように、君のママがかぶせてくれたんだよ」

「ママ」というより、この青年の発音では「Mummy」だったのだが、ご愛嬌にしておく。

「そうなの？」

「そうさ。友達にも教えてあげな」

「わかった！ ほんとうに、ありがとう、おにいちゃん！」
特別に紐をかけてもらうと、少女は大きく腕を振りながら、元気に駆け出した。

——風来坊の髪は、浅葱色。瞳の色は、黄金色だった。

それも染めたような不自然な色ではなく、生まれつき備わっているかのような、自然な色合いだった。

そのときは、私はその色に気をとられていて、気づいたときには『彼』の姿は消えていた。

正直聞きたいことは盛りだくさんだったが、白昼夢を見ていたような、ぼんやりとした気持ちだったので、それどころではなかったのだ。

その後、一週間ずつ間を空けて、二回彼と遭遇したが、そのときも私は声をかけられずにいた。

彼はいずれも、扇子を手にしていて。また、誰かにお礼を言われていた。

三度目の正直ならぬ、四度目の正直で、私はようやく彼に声をかけた。

それも、彼が信じられないことをした現場に、しっかりと居合わせてしまったからだだった。

「ねー、けんたくん、あぶないってー」

学校帰りの小学生、今度は二、三年生くらいの男子三人。

一人はランドセルを地べたに置いて、木に登っていた。二人はそれを心配そうに見つめ、繰り返しそう言っている。

ここの木は枝がそこまで太くない。現に、少年が手をかけるたびに、ぎしりみしりと音がする。

しかし、『けんたくん』は聞いていなかった。夢中で幹にすがりつき、比較的太さのある枝に到達すると、枝にまたがった。そうして私がちょうどその場を通りがかった頃、バランスを崩した。とんでもなく阿呆だ。

重力というのは非情なもの。そのまま地面に頭から激突する——はずだった。

いつの間にか、目の前にいたあの青年が、広げた扇子を下から上に大きく振った。

びゅおう。私にも聞こえるくらい、大きな風の音。『けんたくん』が、空中で一瞬止まり、数センチ浮き上がった。

そのまま尻から、ゆっくりと落ちる。

つまり、青年は扇子で風を巻き起こし、『けんたくん』とやらを浮き上がらせた。そうやって、少年を救った、と。

彼は、少年にぼかんとする隙を与えなかった。

「何してるんだ、大人のいないところで」

怒鳴りこそしないものの、厳しい口調だった。骨の折れたときの痛さを、細かく説明し、最悪のケースを並べ立て、少年たちを震え上がらせた。涙ぐんでいる者もいたくらいだ。

「……僕も人のことは言えないけどね」

最後にこうつけくわえたあたり、少しばかりやりすぎたと思つたのかもしれない。

「あ、あの」

少年たちが去ると、私は扇をポケットにしまう青年に近づいた。林道に、他の通行人はいなかった。

彼がこちらを見下ろす。

「し、失礼ですが、あの、今……何を？」

けお 気圧されつつ、質問を絞り出すと、彼は面倒臭そうな声で、

「ご覧になった通りですが」

素っ気なく答えた。心が折れかける。

「いや、あの、その扇子で……」

「そうですよ」

何か文句でもあるんですか、顔がそう言っている。

「その扇子で、風を起こせるんですか？」

「……まあ、一応は」

「何ですか？」

「いや、何でと言われましても……」

半ば強引に、私は彼に質問した。このまま逃がしたら、一生後悔する。いわゆる第六感というやつは、本当に機能するようだ。

意外と青年は、律儀に全ての質問に答えてくれた。面倒臭うな顔と声は、別に本当に面倒臭がっているのではなく、生来持っているものらしい。

——名はサミュエル・エヴィリア。アメリカ人。十八歳。双子の妹がいる。特異体質だから、あんな髪色と瞳の色をしている。

「特異体質って？」

「風がある程度操れます。僕の他にも、三人、そういう人間が、その体質を生かし、同じ仕事をしています。僕ら四人で、四大元素を司るそうです」

「ふーん……？　でも、その髪も瞳も、帽子かぶったり、眼鏡外したりなんかして、隠すようなものじゃないと思いますけど」

「見せるようなものでもありません」

伊達眼鏡ですし。サミュエルはそう言うと、苦笑して肩をすくめた。

帰宅するなり、私は自室の本棚に飛びついて、ある本を探した。

【現代に生きる哲学——四大元素——】。大学教授の父から読むようにさんざん言われ、ことごとくスルーしてきたが、まさか、役に立つ日が来るとは。

火、空気（風）、水、土。これが、この世を構成するとかしいとか……。

「びやあああああああ！」

階下から、弟の泣き声。母がなだめる声。

二歳になったばかりの、十四歳差の弟。しょっちゅうやかましい。

集中できやしない。舌打ちすると、本を閉じた。

サミュエルが風を操ったのは、紛れもない真実だった。彼が言ったことを馬鹿らしいと一蹴することは、私にはできなかった。

不思議を否定するよりも、非日常に酔いたかったのである。

黄色い帽子のあの少女が、何も不思議に思うことなく、彼にお礼を言ったように。

私だって、見たものを、見たまま信じたかったのだ。

『彼はいつも突然現れる——もしかしたら、いつもは空を飛んでいるとか。何かあったときだけ、空からずとんと落ちてくるのかな。それに、何でよくあそこを通るんだろう？　鳥と友達だったりするのかも』

まあ色々、今思えば笑ってしまうほど、現実離れたことを

考えた。共働きをしていた頃産まれた私とは違い、両親に構ってもらえるくせに、弟はよほど気に入らないことがあったらしく、始終泣き叫んでいた。

サミュエルに会える時間も日程も、バラバラだった。一ヶ月会えないこともあったし、頻繁に会うこともあった。それもそうだ。彼はぶらぶらと歩いているだけで、よく林道を通る。それだけなのだ。私はサミュエルの姿を見つけると、必ず彼に駆け寄った。

彼は暑さにあえぎながら林道を通る人々に、涼しい風を送ってやったり、雨が降りそうで急いでいる人々のために、風で雲を少し遠ざけて、雨を遅らせてやったりしていた。

一つ勘違いしないしてほしいのは、私はサミュエルに恋情を抱いていたわけではないということ。そもそも彼は、どこか現実離れた空気をまとっていて、実際にここに存在しているのか、何度か疑った。人間、というには、あまりに地に足がついていないような。本当に空気のような、風のような青年だった。

そうして何度か立ち話をするうち、私は彼に関する知識を増やしていく。

今は仕事の関係で、よくこの街に来るのだということ。日本に来て四年経つこと。日本文学が好きで、日本語を勉強した

ということ。

「逍遥が好きなんです」

「しょうよう？」

「散歩のことを、こう言うこともあるそうです。この間読んだ本に、出てきました。散歩と言うよりも、何だか古風な響きがありませんか」

「そうだね。逍遥、か。逍遥……でもサミュエル君は、地面を歩いている感じがしないね」

「いや流石に、僕も飛ぶことはできませんよ」

「うん、飛ぶっていうより、大空を歩くって感じかな」

地べたを逍遥するサミュエルは、あまり想像できなかった。彼はもつと、自由だった。

私がそら、と言ったとき、彼の目が何かを愛おしむように、わずかに細められた。だが私はそのとき、気のせいだと思ったのだ。

そして、最後に彼と話した日。

今でも覚えている。夏の半ば。風の強い日。悲鳴のような風が、弟の叫び声と重なる。

ばちん。

思いきり弟の頬を叩いた。私の教科書に、弟はオレンジジュースをこぼしたのだ。我慢ならなかった。母の怒号から逃げる

ように、家から飛び出した。

こんな風になるのなら、弟なんていらなかった。

確かに弟妹は欲しかったが、あんなにうるさい生き物を弟だなんて、認めたくはない。

帰ったら、いなくなっていてほしいと思った。

そうして私は愚かにも、偶然林道に居合わせたサミュエルに、口汚く叩きつけた。

サミュエルは黙って聞いていた。しかし私の話が終わると、鋭い声でこう言った。

「……あなたの話を聞いていると、優しくしてほしい。静かにしてほしい。こちらのことを考えてほしい。愛してほしい。『何々してほしい』ばかりに聞こえました」

「……っ！」

何も言えなかった。彼の言葉は正確に、一ミリの狂いもなく、私の心臓を突いた。

「なぜ他人に求めるばかりなのですか。自分は何もしないのに。何を甘ったれているのですか。あなたはもらったものしか、いやもらったものすら返さないことがあるでしょう。自分はそうなのに、なぜ他人は違うと思うのですか」

サミュエルは目をそらし、吐き捨てるようにつぶやく。

「……反吐が出る」

彼を失望させた。私が、彼にこう言わせた。

サミュエルに、汚らしい一言を言わせてしまった自分が、

世界で一番の罪人のように思えた。地面にヒビが割れて、崩落していくような気がした。

彼の後ろ姿が見えなくなっても、しばらく立ち尽くしていた。

私に、彼を追う資格はない。意地を張るように、唇を噛みしめて、滲んでくる涙を止めた。

風はすっかり止まっていた。

それから、あの風来坊に会うことはなくなった。

思えば彼は、林道をよく通るといっても、特定のコースをたどっているわけではなかった。

気の向くままに、足の向くままに、ただぶらぶらと歩いているだけ。

逍遙していた、だけだった。

やがて、深緑の葉も、赤や黄色に色づいた頃。

「こんにちは」

いつもの林道を、うつむいて歩いてきた私は、最初、自分が呼ばれているとはわからずに、そのまま通り過ぎた。

「あの！」

袖を引かれ、立ち止まる。訝しげに声をかけてきた人物を見た私は、サミュエル、と声を出しそうになった。

それは青年ではなく、サミュエルと同じ年くらいの少女だったのだが——同じ、浅葱色の髪と、黄金色の瞳をしていたのだ。

「私、シエーラ・エヴィリア。サミュエル、の双子、の妹です」

その後、控えめに私の名前を確認されたので、うなずく。

双子の妹。確かにそんなこと、言っていたような。

白いチュニックとホットパンツ。同じような革靴と、同じような帽子、それに眼鏡の少女は、人見知りなのか、顔を真っ赤にしていた。兄ほど日本語が堪能ではないらしい。たどたどしく小声で言うので、何度か聞き返さねばならなかった。

「兄から、伝言、あつて、来ました。兄、先日、足、を怪我しました。だから、来れないのです」

「怪我……つて。だつ、大丈夫なんですか！」

「お医者さん、看てもらいました。大丈夫、言っていました」

「歩けるようになりますか？」

「なるです。骨折した、ではない、でした」

ほ、と息をつく。

シエーラは、一生懸命、言葉が続けた。

「でも、私たち、もう、この街、いなくなる、です。もう、仕事終わりました。さよなら、言いたかったつて」

「……え？」

「それと。ごめんなさい、言っていました。兄は、ひどいこと言った、つて」

とんでもない。

「ひどいことなんて、そんな……」

「許さなくても、構わない。でも、弟さんと、仲良くして、つて。家族、大切にして、言っていました。私たち、もう家族、いません」

「……」

「私たちの先生に、いっぱい、助けられました。先生、優しい人で、ちよつぱり、厳しい人です。兄、きつと、同じことしたかった」

「……先生？」

「私たち、事情あつて、違う名前を名乗っていたこと、あるです。そのとき、私たちに、素敵な名前、つけてくれて、色んな大切なこと、教えてくれたです。いっぱい、助けってくれたです。」

その先生、日本人。だから、兄、日本が好きです」

よほどいい人なのだろう。話が進むほど、シエーラの顔はほころんで、最後の方には満面の笑みになっていた。

「私は、サラ。兄は、ソラ。そう、名前、つけてくれました」

ソラ……。

顔も見ることのないその『先生』に、私は共感する。

なんて、ぴったりな名をつけたのだろう。

「今も、サラ、ソラと呼ばれるです。でも、最近、ホントの名前も使うですよ。ホントの名前と、先生にもらった名前、行ったり来たりです。兄、ソラって名前、大好きです」

でも、先生に、そう言ったこと、ないです。兄、素直じゃない、ですから。

そう言ってシェーラは、優しく笑った。

私は彼女に、サミュエルに対する謝罪と感謝を述べ、彼女自身にもお礼を言つて、彼女と別れた。

静かな風が吹いていた。

余談だが、大辞林の大先生に「逍遙」の同音語を聞くと、「賞用」という言葉も出てきた。

賞用——褒め称えて、使うこと——。

「ねーね」

手を繋いだ弟が、私を呼んだ。もうすぐ三歳になる。いつ「ねーね」が「お姉ちゃん」になり、やがて「姉さん」「姉貴」になるのか。もしかすると「ババア」かもしれない。それはそれで

楽しみだ。

「なーに」

「どこいくのお」

「ゲーキ屋さん。お母さんの誕生日だからね」

小さく飛び跳ねる弟。木漏れ日が、彼の笑顔を照らす。

「げーき！」

「そうだよー。チョコとイチゴ、どっちにしようか」

「いちごー！」

びゅおう——ふと、強い向かい風が吹いてくる。飛ばされてしまわないように、帽子を押さえようとしたが、少し遅かった。

帽子はふわりと、私の手が届かないほど高く舞い上がってしまった。つた。

「あー！ ねーね、ぼーし！」

走ればすぐとれただろうが、弟を置いて行くわけにもいかない。まだすぐ転ぶのだ。「大丈夫だよ」と言いつつ、ゆったり帽子を追うが、木に引掛かってしまわないか心配だった。

そのときだった。

ひゅう——と、風が突然、軌道を変えた。

帽子が意思を持つかのように、私の手まで戻ってくる。空を見上げ、あちこちを見回してみたが、木々たち……

それと、大空が、私を見下ろしてくるばかり。

弟が、繫いだ手をぶうんと振った。

「ねーね、よかったねえ」

「……うん」

「あいごとー、かぜさん」

風の当たりが柔らかい。弟の帽子も飛びそうになって、私は顎に紐をかけてやった。

弟は風にありがとうと言っても、私には紐のお礼を言わない。だが、それが普通なのだ。私だって、お礼を言った覚えはない。

その代わり、弟はいつか、近所の子供、下のいとこや自分の子供、自分の孫……彼らに、顎紐をかけてやるようになるだろう。

私も帽子をかぶり直す。

前を向く。

そうして私は、小さな弟の手を引いて、再び歩き始めた。

今日もどこかで、サミュエルは大空を逍遙する。